文 華 苑 の 歴 史

—酔芙蓉の栽培—

今年も沢山の花を咲かせ、多くの目を楽しませてくれた酔芙蓉。文華苑の四季を語る欠かせない風物です。花の時期はもう終わりを告げましたが、来館された皆様方のご要望に応え、今に至るまでの栽培の歩みを振り返ってみたいと思います。

—・—・—・—・—・—・—

平成元年9月、知り合いのお寺さんで酔芙蓉の枝を頂き、時期は悪かったのですが、挿し木を試みました。そして、3本が活着しました。文華苑には、もともと芙蓉とアメリカ芙蓉とが多数植えてありましたが、酔芙蓉はありませんでした。前々から、苑では酔芙蓉の苗を植えたいと思っていたそうです。そしてあるとき、酔芙蓉と思って種子を蒔いたところ、花が咲いてみると、実はアメリカ芙蓉だった、ということもあったそうです。

平成2年4月、その酔芙蓉3本を文華苑に植え付けました。8月下旬から開花し始め、文華館に来館されたお客様に喜んで頂いたのでありました。

その秋には通常できにくい種子もできました。翌年(平成3年)その種子を蒔いたところ、30本余りが発芽したのです。苗は生長しましたが、年内には開花しませんでした。

次の年(平成4年)、何とか開花見込みの蕾ができて、楽しみにしていたところ、その中に、1本変わった蕾をつけたものが現れました。それは蕾の小さいうちから苞が割れていたので、他とは違っていることが直ぐに分かりました。(蕾の形は、種類によって異なります。)

普通、酔芙蓉(八重のもの)は、開花前日にならないと苞は割れません。花弁も開花前日より少し顔を覗かせ、徐々に大きくなって、翌日には完全に花を開きます。咲いた花の色は、白色から紅色(桃色)に変化して行きます。ただし、その変化の具合は、気温によって左右されます。気温が低いと色の変化が鈍り、また、翌日になっても花がしぼまないこともあります。そうすると、紅白同時に咲いたように見えます。

9月19日、蕾の一部に白色の花弁が見えました。明らかに縮緬芙蓉であることが分かりました。縮緬芙蓉とは、複数が集まった状態の花をつけるものを言います。個々の花の開花時期は微妙に異なっており、いちどきには開花しません。3日程かかってようやく満開となり、色も部分的に変化し、白色から紅色(桃色)までが入り交じった状態となります。

10月4日、実生(種子から生えたもの)のうちの1本から、一重の酔芙蓉が開花しました。このように、種子を蒔くと、一重、八重、縮緬の酔芙蓉、普通の芙蓉と色々なものが現れるのです。挿し木も何本したでしょうか。活着したものを、多くの人に差し上げ、喜んで頂いた事もありました。挿し木したものを含め、現在、文華苑では、各種の酔芙蓉が20株以上育っています。

酔芙蓉の種子

酔芙蓉の種子は、普通できないとされています。実際は、気温が高くて開花時間が短いと、種子ができにくく、気温が低くなって開花時間が長くなると、種子ができるようになります。それがどのような現象なのかは分かりませんが、気温が高い時期では雄しべと雌しべとが不完全で、気温が低くなると完全になると考えられます。

酔芙蓉の特徴

酔芙蓉—アオイ科・フヨウ属・
フヨウの変種・落葉低木

酔芙蓉とは、花色が白色から紅色に変化するのを酒の酔いに例えた名称です。種類は、一重、八重、七面(縮緬)などがあります。花色の変化は、気温の高い時期(8月下旬～9月中旬)には、正午前から変化し、夕方には花がしぼんで紅色となります。ただし、七面については、開花時期のずれた花が集まった状態ですので、部分的に変化します。花も一重は別として、一日ではしぼまず、紅白が入り交じった状態で咲きます。

色の変化は、温度により内部の物質が色素に変化することによって起こると思われますが、詳しくは分かりません。夏の高温時ほど変化が早くなります。

開花期は、8月下旬から11月上旬までです。普通の芙蓉に比べ、開花時期が少し遅く、耐寒性が劣ります。また、花芽の分化は、短日で反応しますので、明るい野外燈下では、開花時期が異常に遅れます。特にワタノメイガの幼虫に葉を食害され易いので、何度も駆除が必要となります。

(保安員・大平良一)

蕾の状態

満開・白色の状態

満開・紅色の状態

しぼんだ状態

季刊 美のたより No.129
平成11年11月19日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.